

# 大学生における過去の乳幼児との接触経験とその際に抱いた感情

扇 原 貴 志 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科  
首 藤 敏 元 埼玉大学教育学部

キーワード：乳幼児との接触経験、乳幼児との接触時感情、尺度作成、大学生

## 1. 問 題

### 1-1 概 要

本研究は、大学生における過去の乳幼児との接触経験と、その際に抱いた感情を測定する尺度を作成し、両者の関連について量的なアプローチから検討するものである。

### 1-2 乳幼児との接触経験とその先行研究

これまで、青年から成人を対象とした養護性や親準備性、対児感情や子ども観といった子どもへの態度を検討した多くの研究において、乳幼児との接触経験がその要因とされてきた（例えば、安積，2008；花沢，1992；中西・牧野，1989；野村・河上・長谷・藤原，2007）。しかし、従来の接触経験の程度を測定する尺度にはいくつかの問題点があり、経験の程度が適切に測定されていたとは言い難い。以下では、既存の接触経験尺度が有する問題について3点述べる。

第1の問題は、接触経験尺度の多くは研究ごとに別個に作成され、質問項目数や項目内容、評定段階数や頻度表現語などがそれぞれ異なる点である。特に、質問項目の評定方法は尺度により大きく異なる。従来の評定方法を大別すると、主に次の3つの方法が取られてきた。1つ目は、「1～2回したことがある」「そのことを3回以上たびたびしたことがある」というように、これまでの接触経験の積算回数を尋ねる方法である（例えば、花沢，1992）。2つ目は、経験の有無を「ある」「ない」などの2件法で尋ねる方法である（例えば、扇原・村井，2012）。3つ目は、具体的な回数を聞かずに「かなりしたことがある」などの頻度表現語を用いて経験の程度を尋ねる方法である（例えば、野村ら，2007）。

このように、評定方法は研究間に一貫性がない上、いずれの評定方法にも問題点がある。経験の積算回数を尋ねる方法や経験の有無を2件法で尋ねる方法では、その経験の継続性や頻度について検討することはできない。1日で「1～2回」経験した人もいれば、10年かけて「1～2回」経験した人もいと推測されるためである。花沢（1992）は、児童期以降に乳児との接触経験を多く持った者は愛着的な対児感情が強いとしている。しかし、接触回数だけの測定では経験の継続性や頻度について検討することは難しいといえる。接触の頻度も重要な指標であるといえよう。しかし、具体的な回数ではなく、「かなり」「しばしば」などの頻度表現語を評定に用いた場合、回答者によって頻度表現語の解釈が異なり、程度の差について正確な測定できなくなるおそれがある。こうした問題を避けるためには、頻度を具体的な回数として頻度表現語に組み込むことで対処できると考えられる。すなわち、「しばしばあった（月に数回程度）」というような表現を用いて評定を求めるのである。これであれば、従来の評定方法が持つ問題は解決できるであろう。

従来の接触経験尺度が持つ第2の問題は、多くの尺度において、直接的な接触経験のみが測定

されることが多く、間接的な接触経験については測定されていない点である。接触経験尺度のうち、頻回に利用されるものとしては、花沢（1992）の乳児接触体験尺度や、野村ら（2007）の子どもとの接触体験尺度がある。しかし、これらの尺度は、乳幼児と遊ぶ、世話をする等の直接的な接触経験の程度についてのみを測定しており、乳幼児の様子について見たり聞いたりする、学習する、メディアを通して見るといった間接的な接触経験を尋ねる項目は存在しない。星野・日潟・吉田（2008）は、親準備性のうち、子どもが好きな程度や嫌悪感情は、直接的な接触経験以外にもメディアによる影響や間接的な接触経験の影響を受けることを示した。このことから、子どもの姿をメディアや日常生活を通して見たり聞いたりするといった間接的な接触経験もまた、子どもへの態度に影響を及ぼす要因であるといえる。従って、直接的な接触経験と併せて間接的な接触経験の程度を測る項目も加え、経験の程度を総合的、かつ多面的に測定できる接触経験尺度を作成する必要があるといえよう。

第3の問題点は、接触した時期によって接触経験の程度が異なる可能性を考慮していない点である。例えば、小学生の時は幼児とほぼ毎日遊んだが、中学生になると幼児と遊ぶ機会が減ったというような場合、従来の尺度では、接触した時期を区別していないため、特に頻度表現語を用いた尺度において、回答者がいつの時期の経験の程度について評定すべきなのか苦慮するおそれがある。よって、最も接触経験が多かった時期を尋ねた上で、その時期における経験の程度を尋ねるという方法を取ることで、より回答しやすい尺度になると考えられる。そこで本研究では、最も接触経験が多かった時期を尺度の冒頭で尋ねた上で、その時期の経験の程度を尋ねるという方法を用い、接触経験の程度を測定することとする。

以上を踏まえ、乳幼児の接触経験について、直接的、間接的の両側面から測定できる尺度を作成できれば、接触経験が要因とされる子どもへの態度との関連について、より精緻な考察を加えることができる可能性がある。そこで本研究では、まず乳幼児との接触経験を多面的に測定できる尺度の作成を試みる。

### 1-3 乳幼児との接触時に抱いた感情

上述のように、これまで乳幼児との接触経験は子どもへの態度を形成する1要因とされ、接触経験を多く持つことが肯定的な子どもへの態度を育むとされてきた。しかし、接触経験のみを子どもへの態度の要因とするには限界がある。なぜなら、接触時に経験した感情により、その後の乳幼児への接近行動に違いが生じると考えられるためである。つまり、接触時に良い感情を抱けば、その後も乳幼児とふれ合おうとする動機づけがなされるが、嫌な感情を抱けば、接触に対して回避的になると推測される。

岡田（2010）は、小児病棟施設で実習を行った保育系の学生は、通常の保育施設で実習した後よりも子どもへの肯定的なイメージや親近感が低下することを明らかにし、この理由を小児病棟で過酷な闘病をしている子どもを目の当たりにしたことで、困惑や不安を感じたためではないかと推測している。

ところが従来の研究では、過去の接触経験の程度は測定されていても、その際に抱いた感情については尺度を用いて量的に検討した研究は見られない。乳幼児とのふれ合い体験等の効果に関する研究の中には、自由記述法などにより、接触時の感情を検討しているものもある（例えば、佐々木・末原・町浦，2009）が、それらは量的な指標ではなく、一般化可能性には限界があるといえよう。

そこで本研究では、大学生を対象に過去の乳幼児との接触時に抱いた感情を量的に測定できる尺度を作成することとする。そして、上述の接触経験尺度との関連について検討し、接触経験とその際の感情について量的な側面から探ることとする。これにより、今後、子どもへの態度との関連を検討する際に、接触経験のほかに接触時の感情についても加えて分析することで、より豊かな示唆が得られるものと期待される<sup>1)</sup>。

#### 1-4 本研究の目的

以上を踏まえ、本研究では以下の3点について検討することを目的とした。第1の目的は、乳幼児との接触経験の程度を測定する尺度を作成することであった。第2の目的は、乳幼児との接触時に抱いた感情の程度を測定する尺度を作成することであった。そして第3の目的は、接触経験とその際に抱いた感情との関連について量的な側面から検討を試みることであった。

## 2. 方 法

### 2-1 調査対象・時期

首都圏の大学生314名に質問紙調査を実施した。このうち、乳幼児との接触経験が全くないとした者、25歳を超える者、回答内容に著しい不備がある者の70名を除いた244名（男性75名、女性169名；平均年齢19.87歳， $SD=1.28$ ）を分析対象とした。調査時期は2013年12月～2014年2月であった。

### 2-2 質問紙

#### (1) 乳幼児との接触経験尺度

乳幼児との接触経験の程度を測定する尺度を作成するため、従来の接触経験尺度を参考に項目を作成し、一部は独自に作成した。具体的には、花沢（1992）の乳児接触体験尺度から13項目、野村ら（2007）の子どもとの接触体験尺度から4項目、中嶋・中・林田・宮下・森藤・山下・本多（2005）の子どもへの接触体験尺度から5項目、関・丸山・亀田・島田・西村（2004）の子どもへの世話体験尺度から1項目、渡邊・工藤（2003）の乳幼児との接触経験尺度から1項目を参考に項目を作成し、これらに15項目を自作、追加した。よって、当初の項目数としては計39項目が作成された。これらの項目について4段階評定（1.「全くなかった」2.「まれにあった（年に数回程度）」3.「しばしばあった（月に数回程度）」4.「よくあった（月に数回以上）」）で尋ねた。これらの質問項目を尋ねる以前に、接触経験が最も多かった時期（最多接触時期）を「小学校期」「中学校期」「高校期」「いずれの時期も全くなかった」の4つの中から選択し、その時期における経験の程度を回答するよう求めた。

#### (2) 乳幼児との接触時感情尺度

乳幼児との接触時に抱いた感情の程度を測定する尺度を作成するため、先行研究を参考に項目を作成し、一部は独自に作成した。具体的には、高濱・野澤（2011）の2歳と3歳の母親の感情尺度より8項目、佐々木ら（2009）の大学生が乳幼児と接触体験をした際の認識や感情についての自由記述から抽出された単語より21項目、金谷（2008）の大学生が乳幼児との交流前後に子どもに対する気持ちについて綴った自由記述の内容から11項目、独自に作成した4項目について、それぞれ表現を統一し、計44項目を作成した。これらの項目について4段階評定（1.「全く感じ



なかった」2.「あまり感じなかった」3.「やや感じた」4.「とても感じた」)で尋ねた。評定に際しては、上記の最多接触時期における接触時の感情について想起し、回答するよう求めた。

### 3. 結果と考察

#### 3-1 乳幼児との接触経験

##### (1) 乳幼児との接触経験尺度の構成

乳幼児との接触経験尺度39項目について、各質問項目の得点が高いほど、接触経験の程度が多くなるように得点化した上で、因子分析(重みづけのない最小2乗法・Promax回転)を行った。因子数は、スクリープロット、固有値の変化、および解釈可能性から3因子として分析した。各項目の因子負荷量が1つの因子に.40以上、かつ他の因子への負荷量が.40未満であること、共通性が.30以上であることを基準に繰り返し分析を行った結果、3因子36項目が抽出された(表1)。

第1因子は、「一緒に遊んだこと」、「遊び相手をしたこと」、「おしゃべりをしたこと」などの20項目で構成されており、乳幼児と共に遊んだり、遊びの場を共有したり、双方向的な関係を持ったりする場面における接触経験の程度を表していることから、「遊びの共有」と命名した。

第2因子は、「おむつを替えたこと」、「お風呂に入れたこと」、「ミルクを飲ませたこと」などの9項目で構成されており、乳幼児の世話や養育経験の程度を表していることから、「世話」と命名した。

第3因子は、「新聞や雑誌などで乳幼児に関する記事を読んだこと」、「街中で乳幼児の行動を意識して見ていたこと」、「乳幼児の成長や発達について学んだこと」などの7項目で構成されており、乳幼児の言動や様子を観察したり、学んだり、メディアを通して接触したりするといった間接的な接触経験の程度を表していることから、「間接接触」と命名した。

因子間相関については、「遊びの共有」と「世話」において強い正の相関が見られた。原田(2006)は、子どもとの接触経験について、小さな子どもを抱いたり、遊ばせたりした経験である「子どもとの接触経験」と、小さな子どもに食事を与えたり、おむつを替えたりした経験である「育児経験」の2つに分けて尋ね、その関係を検討した。その結果、両経験間には連関が見られたとしている。本研究における「遊びの共有」と「世話」の因子間相関の高さは、先行研究と同様の傾向を示したものであるといえる。

各下位尺度について、信頼性係数(Cronbachの $\alpha$ 係数)を算出したところ、 $\alpha = .83 \sim .97$ であり、高い内的整合性が示された。従って、当該下位尺度に属する項目の合計得点をもって、各下位尺度得点とした。

##### (2) 乳幼児との接触経験の男女差および最多接触時期による差

乳幼児との接触経験尺度について、各下位尺度の平均得点を算出した。同時に、男女別、最多接触時期(小学校期、中学校期、高校期)別にも算出し、平均値差の検定を行った(表2)。

その結果、男女別では、女性の方が「遊びの共有」「間接接触」経験が多かった。女性は、幼い時期から乳幼児と多くの接触機会を持つように周囲から期待され、接触することが動機づけられる傾向があるためと考えられる。

最多接触時期別では、全下位尺度において有意な主効果が見られたため、Tukey法による多重比較を行った結果、「遊びの共有」と「世話」では、小学校期に接触経験が最多の者の方が中学校期や高校期が最多の者よりも、それらの経験が多かった。一方、「間接接触」では、高校期が最多

表1 乳幼児との接触経験尺度の因子分析結果

	第1因子 遊びの共有	第2因子 世話	第3因子 間接接触	共通性
一緒に遊んだこと	<b>1.07</b>	-.21	-.09	.81
遊び相手をしたこと	<b>1.05</b>	-.18	-.05	.83
おしゃべりをしたこと	<b>1.04</b>	-.22	-.03	.79
さわったこと	<b>.96</b>	-.08	-.09	.77
おもちゃで遊んだこと	<b>.95</b>	-.07	-.07	.77
一緒に運動やスポーツをしたこと	<b>.90</b>	-.09	-.07	.66
乳幼児が描いた絵を見たこと	<b>.82</b>	-.03	.14	.75
一緒に絵を描いたこと	<b>.80</b>	.08	-.10	.67
手を握ったこと	<b>.72</b>	.10	.07	.69
遊びや歌を教えたこと	<b>.71</b>	.14	-.01	.66
抱っこしたこと	<b>.71</b>	.26	-.14	.73
あやしたこと	<b>.69</b>	.20	-.05	.67
おんぶしたこと	<b>.68</b>	.23	-.08	.69
ほめたこと	<b>.68</b>	.11	.03	.61
絵本や本の読み聞かせをしたこと	<b>.64</b>	.09	.21	.69
泣いている乳幼児をなだめたこと	<b>.60</b>	.35	-.07	.73
乳幼児が作った粘土などの工作を見たこと	<b>.59</b>	.07	.24	.61
乳幼児向けの絵本や本を読んだこと	<b>.57</b>	.05	.35	.69
乳幼児が出ているテレビ番組を見たこと	<b>.48</b>	.12	.15	.43
散歩に連れて行ったこと	<b>.43</b>	.30	.03	.47
おむつをかえたこと	-.17	<b>.97</b>	-.03	.71
トイレの世話をしたこと	-.05	<b>.88</b>	.01	.71
ミルクや離乳食を作ったこと	-.14	<b>.82</b>	.02	.54
お風呂に入れたこと	.01	<b>.82</b>	-.16	.57
ミルクを飲ませたこと	.06	<b>.80</b>	-.01	.69
食事を食べさせたこと	.12	<b>.74</b>	.05	.74
乳幼児を寝かしつけたこと	.11	<b>.68</b>	.08	.64
服を着替えさせたこと	.35	<b>.57</b>	.01	.74
ほほずりやキスをしたこと	.37	<b>.47</b>	.05	.64
新聞や雑誌などで乳幼児に関する記事を読んだこと	-.14	-.07	<b>.78</b>	.50
街中で乳幼児の行動を意識して見ていたこと	-.01	-.06	<b>.75</b>	.52
乳幼児の成長や発達について学んだこと	-.06	-.17	<b>.74</b>	.44
街中で乳幼児の声や会話を意識して聞いていたこと	.06	.04	<b>.66</b>	.51
乳幼児に関する本を読んだこと	-.09	.09	<b>.64</b>	.42
乳幼児がいる人からの子育ての話を聞いたこと	.04	.06	<b>.52</b>	.33
テレビの子育て番組を見たこと	.07	.14	<b>.47</b>	.35
他の因子の影響を無視した因子寄与	18.35	15.36	7.63	
Cronbachの $\alpha$ 係数	.97	.94	.83	
因子間相関	第1因子	第2因子	第3因子	
第1因子	遊びの共有	1.00		
第2因子	世話	.71	1.00	
第3因子	間接接触	.44	.49	1.00

表2 乳幼児との接触経験尺度得点の平均値と差の検定（男女別・最多接触時期別）

	全体	男性 n=75	女性 n=169	<i>t</i> ( <i>df</i> )	Cohen's <i>d</i>	小学校期 n=143	中学校期 n=59	高校期 n=40	<i>F</i> ( <i>df</i> )	$\eta^2$	多重比較
遊びの共有	平均 48.51 ( <i>SD</i> ) (17.05)	44.28 (16.04)	50.40 (17.19)	-2.56 * (231)	0.36	54.13 (17.01)	39.83 (12.51)	42.24 (15.67)	20.30 ** (2, 228)	.15	小>中・高*
世話	平均 13.92 ( <i>SD</i> ) (6.68)	12.93 (5.85)	14.36 (6.99)	-1.65 (168.96)	0.21	15.28 (7.18)	11.72 (5.16)	12.35 (5.78)	7.44 *** (2, 235)	.06	小>中・高*
間接接触	平均 11.52 ( <i>SD</i> ) (4.42)	9.93 (3.48)	12.24 (4.62)	-4.28 *** (186.55)	0.54	11.09 (4.21)	11.41 (4.06)	13.18 (5.36)	3.51 * (2, 234)	.03	高>小*

\* $p<.05$ , \*\* $p<.01$ , \*\*\* $p<.001$ 

の者の方が小学校期が最多の者よりも経験が多かった。直接的な接触経験である「遊びの共有」や「世話」は、より年齢が低い段階で経験が多く、間接的な接触経験は、より年齢が高い段階で経験が多くなることが示された。特に、「間接接触」において高校期に接触が多かった理由としては、高校の家庭科の授業内において、子どもの発達や保育について座学を中心に学習する内容が存在する（文部科学省，2008）ためであると考えられる。小学・中学校期において直接的な接触経験が少なくても、高校期に授業を通して間接的な接触経験が提供されたことで、高校が最多接触時期となった者も一定数存在するであろう。そのような回答者は、高校における授業内容を想起して回答したと考えられる。こうした回答者の影響を受け、高校期が最多接触時期の者では「間接接触」経験が多かったのではないかと思われる。また、将来の職業や進路を考える際に、子どもに関心がある者は乳幼児に関する職業を調べるなどして、間接的な接触経験を高めた者も存在するであろう。一方、高校期より下の年齢段階では、乳幼児について学習したり、意識的に観察したりすることは、さほど多くない経験であるとも解釈できよう。

### 3-2 乳幼児との接触時感情

#### (1) 乳幼児との接触時感情尺度の構成

乳幼児との接触時感情尺度44項目について、各質問項目の得点が高いほど、抱いた感情の程度が高くなるよう得点化した上で、因子分析（重みづけのない最小2乗法・Promax回転）を行った。因子数は、スクリープロット、固有値の変化、および解釈可能性から3因子として分析した。各項目の因子負荷量が1つの因子に.40以上、かつ他の因子への負荷量が.40未満であること、共通性が.30以上であることを基準に繰り返し分析を行った結果、3因子30項目が抽出された（表3）。

第1因子は、「うれしかった」、「楽しかった」、「癒された」などの12項目で構成されており、乳幼児と接触した際の喜びや楽しさといった快感情の程度を表していることから、「快感情」と命名した。

第2因子は、「戸惑った」、「難しかった」、「上手くできなかった」などの11項目で構成されており、乳幼児と接触した際の戸惑いや困惑、緊張の程度を表していることから、「当惑感情」と命名した。

第3因子は、「いらだった」、「がっかりした」、「いやだった」などの7項目で構成されており、乳幼児と接触した際の怒りや落胆といった不快な感情の程度を表していることから、「不快感情」と命名した。

因子間相関については、「当惑感情」と「不快感情」において中程度の正の相関が見られた。一方、「快感情」と「当惑感情」「不快感情」との間の相関は弱かった。このことから、接触時に快感情を抱いた場面においては、同時に戸惑いや不快な感情は抱きにくい反面、戸惑いと不快な感情は同時に経験しやすいことが示唆された。

表3 乳幼児との接触時感情尺度の因子分析結果

	第1因子 快感情	第2因子 当惑感情	第3因子 不快感情	共通性
うれしかった	.84	-.01	.03	.70
楽しかった	.83	-.11	.08	.67
癒された	.78	.01	-.08	.64
かわいかった	.77	-.05	-.03	.60
元気が出た	.75	-.03	-.02	.57
面白かった	.73	-.03	.05	.52
気持ち良かった	.73	-.09	.04	.52
あたたかかった	.69	.09	.07	.50
やわらかかった	.69	.13	.01	.50
飽きなかった	.67	.05	-.07	.47
ほほえましかった	.62	.09	-.08	.41
すごいと思った	.57	.21	.01	.39
戸惑った	-.04	.84	-.04	.67
難しかった	.11	.81	-.12	.62
上手くできなかった	-.05	.77	-.12	.53
緊張した	.00	.76	-.16	.50
不安を感じた	-.07	.68	-.06	.43
焦った	.11	.64	.08	.48
心配だった	.19	.59	.06	.43
精一杯だった	.15	.54	.03	.34
困った	-.02	.48	.29	.42
疲れた	-.01	.47	.35	.48
よくわからなかった	-.23	.46	.16	.35
いらだった	.16	-.08	.88	.72
腹が立った	.18	-.10	.83	.63
馬鹿にされたように感じた	-.04	-.12	.67	.41
がっかりした	-.01	-.07	.62	.36
いやだった	-.20	.12	.59	.48
悔しかった	-.03	.05	.58	.36
ゆううつに感じた	-.21	.19	.54	.47
他の因子の影響を無視した因子寄与	6.71	5.56	4.49	
Cronbachの $\alpha$ 係数	.92	.89	.85	
因子間相関	第1因子	第2因子	第3因子	
第1因子	快感情	1.00		
第2因子	当惑感情	.07	1.00	
第3因子	不快感情	-.10	.41	1.00

各下位尺度について、信頼性係数（Cronbachの $\alpha$ 係数）を算出したところ、 $\alpha = .85 \sim .92$ であり、高い内的整合性が示された。従って、当該下位尺度に属する項目の合計得点をもって、各下位尺度得点とした。

## (2) 乳幼児との接触時感情の男女差および最多接触時期による差

乳幼児との接触時感情尺度について、各下位尺度の平均得点を算出した。同時に、男女別、最多接触時期（小学校期、中学校期、高校期）別にも算出し、平均値差の検定を行った（表4）。

その結果、男女別では、女性の方が接触時に「快感情」を経験する程度が高く、「不快感情」を

表4 乳幼児との接触時感情尺度得点の平均値と差の検定（男女別・最多接触時期別）

		全体	男性 n=75	女性 n=169	<i>t</i> ( <i>df</i> )	Cohen's <i>d</i>	小学校期 n=143	中学校期 n=59	高校期 n=40	<i>F</i> ( <i>df</i> )	$\eta^2$	多重比較
快感情	平均	37.04	33.64	38.57	-4.85 ***	0.67	37.64	36.34	35.90	1.11	.01	
	(SD)	(7.65)	(8.08)	(6.95)	(240)		(8.08)	(6.68)	(7.56)	(2,237)		
当惑感情	平均	24.57	24.50	24.61	-0.11	0.02	23.93	25.98	24.68	1.95	.02	
	(SD)	(6.75)	(7.18)	(6.57)	(240)		(6.39)	(6.91)	(7.55)	(2,237)		
不快感情	平均	10.00	9.44	10.24	-1.78 †	0.25	10.45	9.51	9.23	3.22 *	.03	小 > 高†
	(SD)	(3.24)	(3.07)	(3.29)	(239)		(3.51)	(2.73)	(2.73)	(2,237)		

† $p < .10$ , \* $p < .05$ , \*\*\* $p < .001$ 

経験する程度も高い傾向が見られた。女性の方が大学入学以前の乳幼児との接触経験が多かったのは上述の結果の通りであるが、接触経験が多ければ、その分、経験する感情も多様で、その量も多くなると考えられる。そのため、女性の方が得点は高くなったのであろう。

最多接触時期別では、「不快感情」において有意な主効果が見られたため、Tukey法による多重比較を行った結果、小学校期に接触経験が最多の者は、高校期が最多の者よりも「不快感情」を経験する程度が高かった。小学校期においては、遊びや日常生活の中で年少の乳幼児と接する機会が多いと推測される。小学生にとって接触対象の乳幼児は年齢的にも近く、弟妹であることも多いと思われる。そこでの相互作用の中では、年齢的な近さゆえのいざこざやケンカが生じるなど、不快な感情を経験する機会も多いと考えられる。一方、乳幼児とは年齢的に離れた高校生では、子どもと青年という立場の違いへの気づきや意識もあり、不快な感情は抱きにくいと考えられる。そのため、小学校期に接触経験が最多であった者の方が「不快感情」をより経験しやすかったのであろう。

### 3-3 乳幼児との接触経験と乳幼児との接触時感情との関連

乳幼児との接触経験尺度と乳幼児との接触時感情尺度の得点間に関連が見られるか検討するため、相関係数を算出した。同時に、男女別、最多接触時期別にも算出した（表5，6）。

#### (1) 全体の相関

まず全体の相関係数（表5）を見ると、全ての接触経験と「快感情」との間に中程度の正の相関が見られた。また、「遊びの共有」および「世話」と「不快感情」、「間接接触」と「当惑感情」の間で弱い正の相関が見られた。よって、乳幼児との接触経験が多いほど、その際に肯定的な感情を多く抱いていたことが示された。その一方、一緒に遊ぶ経験の多さは「快感情」のみならず「不快感情」とも関連が見られた。これは、遊びという相互作用を多く経験する中で、その楽しさだけでなく、自分の思い通りの遊びが展開できないことへの不快感や、遊びを巡る口論やいざこざ、ケンカなどが生じる場面での苛立ちや怒りなどの不快な感情を経験する機会も増えるためと推測される。また、乳幼児を世話する場面では、乳幼児に対して自分の思い通りの世話ができないことで不快な感情を抱くことが多くなるためと推測される。そのため、乳幼児との遊びや世話をする経験の多さは、快感情だけでなく不快な感情とも関連が見られたのではないかと考えられる。

また、乳幼児との間接的な接触経験が多いほど、「当惑感情」を多く抱いていたという関連が見られたことは、乳幼児について調べたり、学習したり、見聞きしたりする中で、乳幼児の発達の複雑さや、乳幼児を世話することへの困難さを知り、将来的に自分が子育てをすることへの戸惑いや不安感、困難感を抱いたためではないかと推測される。



以上のように、乳幼児との接触経験が多くなるほど、快感情だけでなく戸惑いや不快な感情も抱く傾向があることが示された。従来の乳幼児との接触時の感情について感想文や自由記述による質問紙を用いて検討した研究では、接触時の楽しさや嬉しさといった肯定的感情とともに、関わる上での困難さや戸惑い、不安などの否定的感情も同時に記述されることが明らかになっている（佐々木ら，2009；砂上・日景・中嶋・盛，2005）。先行研究では、このような接触時の快・不快感情の葛藤の様相が質的な分析から明らかになっていたが、本研究では、その葛藤を量的な側面から示すことができたといえよう。

## (2) 男女別の相関

次に男女別の相関係数（表5）を見ると、「遊びの共有」と「快感情」の間で、女性より男性の方が相関係数の値はやや大きかった。また、「遊びの共有」および「世話」と「不快感情」の間では、男性は有意な相関は見られなかった一方、女性ではやや弱い正の相関が見られた。同様に、「間接接触」と「当惑感情」の間でも、男性では有意な相関は見られなかった一方、女性では弱い正の相関が見られた。

表5 全体および男女別の乳幼児との接触経験尺度得点と乳幼児との接触時感情尺度得点の相関係数

		快感情	当惑感情	不快感情
遊びの共有	全体	.47 ***	.04	.20 **
	男性	.52 ***	.07	-.10
	女性	.42 ***	.02	.29 ***
世話	全体	.41 ***	.07	.15 *
	男性	.35 **	.07	-.10
	女性	.42 ***	.07	.23 **
間接接触	全体	.46 ***	.16 *	-.03
	男性	.37 **	.09	-.14
	女性	.45 ***	.19 *	-.04

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

「遊びの共有」との関連において、男性は「快感情」とのみ、より強い関連があった一方、女性は男性より「快感情」との関連が弱く、男性では見られなかった「不快感情」との関連があった。この結果は、遊びの質が男女間で異なることに起因すると考えられる。さわやか福祉財団（2011）が2010年度に小学生を対象に行った調査によると、一緒に遊ぶ人数は男女ともに「3～5人」が最も多かったが、次いで、男子では「6人以上」、女子では「2人」とする回答が多かった。また、よくする遊びでは、男女ともに「テレビ・携帯ゲーム」が最も多かったが、次いで男子では「サッカー」や「野球」、「鬼ごっこ」などのルールが厳格な運動遊びが多かった。一方、女子では、「読書・漫画」や「滑り台・ブランコ」「かくれんぼ」や「折り紙」など、外遊びも含まれるものの、男子よりも少人数で、言語的相互作用も密であると推測される遊びが多かった。日常場面において、年少の乳幼児と遊ぶ場合、特に接触時期が早いほど、その相手は弟妹が主になると推測される。上述の調査結果も踏まえると、男子ではさほど言語的相互作用が多くない運動遊びが展開されやすいが、女子では弟妹と2人きりで言語的やりとりが密な遊びが展開されることが多いと考えられ

る。そのため、女子の方が遊びを通した接触経験が多いほど、多様な言語的相互作用の中で様々な感情を経験し、不快な感情を抱くことも多くなったと推測される。従って、女性は過去の乳幼児との遊びを通した接触経験が多いほど、快感情だけでなく不快感情も同時に経験する傾向があったと考察される<sup>2)</sup>。

続いて、女性において乳幼児を世話した経験が「不快感情」と関連していた理由としては、世話をする中で多少なりとも不快感を抱いた際に、女性は将来、自身が主体となって養育役割を担い、育児をすることを意識し、育児への自信のなさや不適格感を抱き、不快感情が強化された可能性がある。その感情を大学生になっても強く記憶していたため、関連が見られた可能性がある。ただし近年では、男性も積極的に育児参加することが求められているため、なぜ女性のみ、世話経験の多さと不快感情に関連が見られるのかという点は、今後より詳細な検討が必要となるであろう。

そして、女性のみ間接的な接触経験が「当惑感情」と関連が見られた理由としては、乳幼児について学んだり調べたりするほど、乳幼児の存在が現実的なものと認識され始め、将来的に母親となって子育てをする際の不安や心配が生じ、戸惑いを覚えたためであると考えられる。

以上の男女別相関の結果をまとめると、過去の乳幼児との接触経験が多いほど、男性は快感情が抱く傾向があり、乳幼児との接触は楽しいこととして記憶していた。一方、女性では、快感情とともに戸惑いや不快な感情も抱いていたことが示された。これは、今日の日本社会においてもなお、子どもが生まれた際に女性が養育役割を担うことへの期待が根強く、幼いうちから子どもを上手に扱うことへの周囲からの期待が大きいためであると考えられる。すなわち女性は、そのような母性愛神話的な期待を社会や周囲から感じ取る中で、想像していたよりも子どもを上手に扱えなかった際に、育児への自信喪失や不適格感を経験しやすいと推測される。そのため、快感情だけでなく、戸惑いや不快な感情とも関連が見られたと考えられる。

### (3) 最多接触時期別の相関

続いて、最多接触時期別の相関係数（表6）を見ると、小学校期が最多の者は、全ての接触経験が「快感情」と正の相関を有していた。中学校期が最多の者は、小学校期が最多の者よりはやや弱いものの、「遊びの共有」と「快感情」の間で正の相関が見られ、「間接接触」も「快感情」

表6 最多接触時期別の乳幼児との接触経験尺度得点と乳幼児との接触時感情尺度得点の相関係数

		快感情	当惑感情	不快感情
遊びの共有	小学校期	.56 ***	.07	.14
	中学校期	.38 **	.05	.15
	高校期	.24	.16	.17
世話	小学校期	.52 ***	.18 *	.11
	中学校期	.11	-.11	.09
	高校期	.13	.07	.18
間接接触	小学校期	.45 ***	.16	.05
	中学校期	.45 **	.06	-.17
	高校期	.63 ***	.27	-.03

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

と正の相関を有していた。高校期が最多の者は、「間接接触」のみ他の時期が最多の者よりも「快感情」とやや強い正の相関を有していた。また、小学校期が最多の者のみ、「世話」と「当惑感情」の間で弱い正の相関が見られた。ただし、どの時期に接触経験が最多であっても、「不快感情」との間に有意な相関は見られなかった。

つまり、最多接触時期の年齢が低いほど、遊びや世話といった直接的な接触経験と「快感情」に強い関連が見られる一方、年齢が上がるほど、「快感情」との関連が弱まる、あるいはなくなり、直接的な接触経験よりも乳幼児について学習したり調べたりする間接的な接触経験の方が、より「快感情」と強く関連するようになるといえる。この理由としては、小学校期に乳幼児と遊ぶ、世話をするといった直接的な接触経験があった場合、乳幼児をリードし、相手をすることができたことへの喜びが快感情を高めていたと考えられる。他方、年齢が上がると、リードできることは年齢差から考えて当然という認識が芽生え、うまく相手をすることができたとしても喜びは小さくなり、「快感情」との関連が弱まるのではないかと考えられる。

一方、年齢が上がるほど、「間接接触」と「快感情」の関連が強くなるという結果は、実際に乳幼児とふれ合うよりも、間接的な学習により乳幼児について知ることの方が肯定的な感情を持ちやすいことを示している。平成20年度改訂の学習指導要領（文部科学省，2008）では、中学校の家庭科において乳幼児とのふれ合い体験学習を必修項目とし、高校の家庭科においても選択項目とした。本研究では、最多接触時期が中学校期の者は、乳幼児と遊ぶ経験の多さが、その際の快感情と関連していたことから、ふれ合い体験学習の有効性を示唆する結果が得られた。しかし、間接的な接触経験もまた、快感情と強い関連があることから、実際にふれ合うだけでなく、調べ学習や、乳幼児の様子を観察する、育児中の母親に子育てについて尋ねるといった学習も効果的である可能性が示唆された。澤田・上手・奥野（2013）は、女子大学生を対象とした研究において、母子が参加する育児サークル活動の現場に参加するという体験中に母親から子育ての様子を聞くことで、子どもや子育てに関して肯定的な感情が芽生えることを明らかにしている。この先行研究は、対象や接触する時期が本研究と異なるが、乳幼児との間接的な接触が肯定的感情と関連があることを示唆するという点で一致している。間接的な接触経験も、乳幼児との接触時に抱く感情の大きな要因であることを示しているといえよう。

なお、小学校期が最多の者では「世話」が「快感情」とともに「当惑感情」とも関連があった。よって、乳幼児を世話することは小学生にとって、肯定的な感情を抱く体験である反面、難しい課題であり、戸惑いや困難さを認識する経験であるともいえる。中学校期以上では、有意な相関は見られなくなることから、困難さは特に感じられなくなるのであろう。

#### 4. まとめと今後の課題

本研究では、乳幼児との接触経験および接触時感情のそれぞれについて測定する尺度を作成し、両尺度間の関連について検討した。その結果、乳幼児との接触経験が多いほど、その際に抱いた快感情も多くなる反面、戸惑いや不快な感情も高まるという関連があった。すなわち、接触時に快感情だけでなく、当惑や不快といった多様な感情を経験していることが量的に示された。以下では、今後の課題について述べる。

まず、本研究は尺度を作成することが主な目的であったため、作成された尺度を用いて、他の概念との関連を検討することができなかった。冒頭にも述べたように、乳幼児との接触経験は、

親準備性や養護性といった子どもへの態度に影響を及ぼす要因とされている。よって今後は、それらの概念との関連を検討していく必要がある。

また、本研究では接触経験とその際に抱いた感情との関連を量的な指標を用いて検討したが、なぜ本研究で見られたような結果になったのかという考察については推測の域を出ていない。加えて、本研究は大学生が過去の接触経験と、その際の感情を想起して評定するという回想法を用いた。そのため、過去の経験であるほど、その当時の感情について正確に評価することは難しくなり、記憶の歪曲が生じていた可能性もある。よって今後は、乳幼児との接触直後に尺度を用いて感情の評定を求めるといった方法を取る必要がある。こうすることで、接触時に抱いた感情について、より正確で多角的な分析を加えることが可能となり、精緻な考察を加えることができるであろう。その結果、尺度の信頼性と妥当性を高めることができるほか、親準備性や養護性といった他の概念との関連についてのモデルも提示できる可能性がある。

以上のような点に留意して今後検討を重ねることで、本研究で作成した2つ尺度をより応用可能なものに高めていくことができるといえる。

#### 注

- 1) 本研究では、乳幼児との接触経験とその際に抱いた感情の程度を測定する尺度をそれぞれ作成し、その関連に限って検討することで、子どもへの態度との関連を今後検討するための基礎的な資料を提供することとした。
- 2) 本研究の対象となった大学生が小学生であったのは2003年前後と推測されるため、2010年度に実施された先行研究の結果をそのまま当てはめることはできないが、小学生における遊びの様相や傾向と本研究の結果を大まかに対照させることは可能であると考えた。

#### 付 記

本研究の一部は、日本心理学会第78回大会、日本子育て学会第6回大会、および日本発達心理学会第26回大会で発表された。

#### 引用文献

- 安積 陽子 (2008). 看護系・福祉系大学生の養護性の形成に関する一考察——性別と乳幼児接触体験との関連から—— 甲南女子大学研究紀要 看護学・リハビリテーション学編 創刊号, 23-28.
- 花沢 成一 (1992). 母性心理学 医学書院
- 原田 正文 (2006). 子育ての変貌と次世代育成支援——兵庫レポートにみる子育て現場と子ども虐待防止—— 名古屋大学出版会
- 星野 修一・日潟 淳子・吉田 圭吾 (2008). 大学生における子ども観に関する一考察 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 2, 33-42.
- 金谷 有子 (2008). 大学生と幼児との世代間交流の重要性についての探索的研究 埼玉学園大学紀要 (人間学部篇), 8, 119-127.
- 文部科学省 (2008). 学習指導要領
- 中嶋 一恵・中 淑子・林田 りか・宮下 弘子・森藤 香奈子・山下 智美・本多 直子 (2006). 小児看護学初学者が子どもに抱くイメージの構造 県立長崎シーボルト大学 看護栄養学部紀要, 6, 4-58.
- 中西 雪夫・牧野 カツコ (1989). 高校生の「親になることへの準備状態」と保育教育 (第2報) ——「準備状態」の形成に影響を与える要因—— 日本家庭科教育学会誌, 32, 55-59.
- 野村 幸子・河上 智香・長谷 典子・藤原 千恵子 (2007). 子どもとの接触体験からみた看護学生の子どもイメージ 人間と科学 県立広島大学保健福祉学部誌, 7, 169-180.



- 岡田 恵子 (2010). 医療保育科学学生の入学から卒業までの各実習における子ども観の変化 川崎医療短期大学紀要, 30, 69-75.
- 扇原 貴志・村井 潤一郎 (2012). 大学生の子どもへの関心とその関連要因 子育て研究, 2, 3-12.
- 佐々木 綾子・末原 紀美代・町浦 美智子 (2009). 青年期男女の親性を育てる乳幼児との継続接触体験の内容分析による評価 (第1報) 思春期学, 27, 270-282.
- 澤田 英三・上手 由香・奥野 雅子 (2013). 保育体験は女子大学生の子ども観・子育て観をどのように変えるのか? 安田女子大学紀要, 41, 103-114.
- さわやか福祉財団 (2011). 子どもの主体的な遊びにより人間力を育むための調査研究事業報告書 [http://sawayakazaidan.or.jp/asobi\\_hiroba/data/report\\_2010.pdf](http://sawayakazaidan.or.jp/asobi_hiroba/data/report_2010.pdf) (2015年8月1日)
- 関 秀俊・丸山 彩香・亀田 幸枝・島田 啓子・西村 真実子 (2004). 子どもに対する世話体験や触れ合い学習が青年期の対児感情や育児観に及ぼす影響 思春期学, 22, 520-526.
- 砂上 史子・日景 弥生・中嶋 明子・盛 玲子 (2005). 高校家庭科における保育体験学習者の意識変容 (第2報) ——生徒の感想文にみる保育体験学習者の経験内容の分析—— 日本家庭科教育学会誌, 48, 10-21.
- 高濱 裕子・野澤 祥子 (2011). 歩行開始期における親の変化と子どもの変化 (量的アプローチ) 氏家 達夫・高濱 裕子 (編) 親子関係の生涯発達心理学 (pp.141-174) 風間書房
- 渡邊 彩子・工藤 五月 (2003). 中学生の乳幼児接触経験と保育に対する意識 群馬大学教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学編, 38, 207-218.

(2015年8月31日提出)

(2015年10月7日受理)

# **University students' past experiences of contact with infants and their feelings on such occasions**

**OUGIHARA, Takashi**

Doctoral Course, The United Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University

**SHUTO, Toshimoto**

Faculty of Education, Saitama University

## **Abstract**

Relationships between university students' past experience of contact with infants and feelings they had on such occasions were quantitatively investigated. A questionnaire survey was conducted with university students (N = 314). First, a scale for measuring the extent of past contact with infants (Experience of Contact with Infants Scale) was developed and following factors were extracted: "Sharing play," "Care," and "Indirect contact." Next, a scale for measuring the degree of feelings when having contact with infants (Feelings when Having Contact with Infants Scale) was developed and following factors were extracted: "Pleasant feelings," "Embarrassed feelings," and "Unpleasant feelings." Then, the correlation coefficient between the two scales was calculated. Results indicated moderate positive correlations between all sub-scales of the Experience of Contact with Infants Scale and pleasant feelings. Moreover, weak positive correlations were indicated between Sharing play, Care, and Unpleasant feelings. Furthermore, there was a weak positive correlation between indirect contact and Embarrassed feelings. The above results suggested that participants having experienced contact with infants often had various feelings on such occasions. Different experiences of contact with infants and participants' feelings, as well as correlations between such experiences and feelings are discussed.

**Keywords:** experience of having contact with infants, Feelings when having contact with infants, Scale development, University students